

島根県邑智郡瑞穂町 鱒淵4号墳他発掘調査報告書

新山村振興農林漁業対策事業鱒淵永明寺線
改良工事に伴う発掘調査



1994年3月

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会



4号墳埋葬施設検出状況



4号填完掘状況

序

瑞穂の黎明は、過去の発掘調査の結果から20,000年以上前の旧石器時代に求めることができ、原始時代から歴史時代にわたって文化を育んできたことが多くの遺跡から伺われます。しかしながら詳細にわたる調査は始まったばかりであります。特に古墳については70基以上所在が確認されておりますが、性格や墓制について、その実態に迫る調査はほとんどなされておりません。

今回発掘調査を実施した鱗瀬4号墳は、古墳時代中期頃のものと推定され、当地方の中古墳の貴重な資料を得ることができました。本報告書はその調査結果をまとめたものであります。本書が当地方の古墳文化解明の一助になれば幸いに存します。なお、今回の発掘調査にあたり、ご多用の中ご指導いただきました広島大学文学部河瀬正利先生、島根県文化財保護指導委員吉川正氏、島根県教育委員会文化課をはじめ、お力添えをいただきました関係各位に対して深く感謝申し上げる次第であります。

平成6年3月

瑞穂町教育委員会

教育長 澤田 隆之

例　　言

1. 本書は島根県邑智郡瑞穂町大字鱒淵3009-2番地外における連絡道鱒淵水明寺線改良工事に伴い、平成5年9月1日から11月26日にわたって実施した鱒淵4号墳他遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は瑞穂町開発課から委託を受け瑞穂町教育委員会が実施した。
3. 本報告書の執筆は河瀬正利氏の指導で、森岡弘典、藤田睦弘が行い、文責は日次および文末に記した。
4. 出土人骨の鑑定は鳥取大学医学部教授井上貴央氏に依頼し、原稿をいただいたて掲載した。
5. 本書の編集は森岡弘典、藤川陸弘が協議し行った。
6. 本書掲載の図面作成は森岡弘典、藤田睦弘及び上木和枝、石橋貴美子が行った。
7. 本書掲載の地形図は国土地理院の承認を得て同院発行の25,000分の1を複製した瑞穂町管内図を使用したものである。
8. 本書9~12頁の地形図に表示したX軸、Y軸は国土調査法による第III座標系の軸方向である。地形測量図、造構実測図の矢印は磁北を示している。
9. 出土遺物は瑞穂町教育委員会で保管している。
10. 地形測量は株式会社地技研に委託した。

島根県邑智郡瑞穂町

鰐淵4号墳他発掘調査報告書

目 次

序

頁

I. 調査に至る経緯.....	1 (森岡弘典)
II. 鰐淵4号墳の位置と環境.....	3 (藤田瞳弘)
III. 調査区の概要.....	7 (森岡弘典)
IV. ま と め.....	29 (森岡弘典)
V. 付 論.....	33 (井上貴央)

図版・挿図目次

- 図版第1 a. 鷲淵古墳群遠景（南より）
b. 調査区全景（南西より）
- 図版第2 a. 4号墳近景（西より）
b. 4号墳北側土層断面（東より）
- 図版第3 a. 4号墳南側土層段面（東より）
b. 南側テラス付近土層断面（西より）
- 図版第4 a. 4号墳東側土層断面（南より）
b. 東側テラス付近土層断面（南より）
- 図版第5 a. 墳頂付近土層断面（南より）
b. 周溝土層断面（南より）
- 図版第6 a. 周溝完掘状況（南より）
b. 南側テラス（西より）
- 図版第7 a. 北側テラス（西より）
b. 第1主体部石棺検出状況（南より）
- 図版第8 a. 第1主体部石棺粘土被覆状況（北より）
b. 同（西より）
- 図版第9 a. 第1主体部石棺蓋石配石状況（西より）
b. 同石棺蓋石除去後状況（西より）
- 図版第10 a. 第1主体部石棺人骨出土状況（上より）
b. 同副室検出状況（西より）
- 図版第11 a. 第1主体部副室完掘状況（西より）
b. 同側壁粘土被覆状況（南より）
- 図版第12 a. 第1主体部粘土除去後配石状況（南より）
b. 同（西より）
- 図版第13 a. 第1主体部石棺掘り方検出状況（東より）
b. 第2主体部石棺検出状況（西より）
- 図版第14 a. 第2主体部蓋石配石状況（西より）
b. 同（北東より）

- 図版第15 a. 第2主体部石棺蓋石除去後状況（南東より）
b. 同石棺側壁、小口石配石状況（西より）
- 図版第16 a. 第2主体部石棺側壁、小口石配石状況（南東より）
b. 同石棺掘り方検出状況（南東より）
- 図版第17 a. 第3主体部石棺検出状況（北より）
b. 同蓋石配石状況（北西より）
- 図版第18 a. 第3主体部蓋石除去後状況（西より）
b. 同側壁小口石配石状況（東より）
- 図版第19 a. 第3主体部側壁、小口石配石状況（北より）
b. 同石棺掘り方検出状況（西より）
- 図版第20 a. 1号土坑土層断面図（南より）
b. 同完掘状況（西より）
- 図版第21 a. 2号土坑土層断面（西より）
b. 同完掘状況（東より）
- 図版第22 a. 4号土坑土層断面（西より）
b. 3号、4号土坑完掘状況（南より）
- 図版第23 a. 5号土坑土層断面（西より）
b. 同完掘状況（北より）
- 図版第24 a. 5号土坑完掘状況（南より）
b. 6号土坑土層断面（西より）
- 図版第25 a. 6号土坑完掘状況（西より）
b. 1号加工段遺構完掘状況（南西より）
- 図版第26 a. 2号加工段遺構完掘状況（南西より）
b. 東側溝状遺構完掘状況（南東より）
- 図版第27 a. 西側溝状遺構完掘状況（南東より）
b. 道状遺構完掘状況（北東より）
- 図版第28 a. 調査区内出土遺物（須恵器）
b. 同（青磁）
- 図版第29 a. 調査区内完掘状況（南西より）
b. 4号墳より鱗渕集落を望む（北より）

- 図版第30 a. 公開發掘調査風景（西より）
 b. 発掘調査風景（南東より）
- 図版第31 a. 発掘調査風景（西より）
 b. 石棺搬出作業風景（東より）

	頁	
第 1 図	瑞穂町と鱗淵古墳群位置図.....	2
第 2 図	鱗淵古墳群付近遺跡分布図.....	6
第 3 図	鱗淵 4 号墳墳丘土層断面図.....	8
第 4 図	発掘調査前地形測量図.....	9 ~ 10
第 5 図	発掘調査後地形測量図、遺構配置図.....	11 ~ 12
第 6 図	第 1 主体部副室実測図.....	14
第 7 図	4 号墳第 1 主体部箱式石棺実測図.....	15 ~ 16
第 8 図	4 号墳実測図.....	18
第 9 図	4 号墳第 2 主体部箱式石棺実測図.....	19 ~ 20
第 10 図	4 号墳第 3 主体部箱式石棺実測図.....	21 ~ 22
第 11 図	1 号、 2 号、 3 号、 4 号土坑実測図.....	24
第 12 図	5 号、 6 号土坑実測図.....	25
第 13 図	1 号加工段遺構実測図.....	26
第 14 図	2 号加工段遺構、溝状遺構実測図.....	27
第 15 図	道状遺構実測図.....	27
第 16 図	調査区内出土遺物実測図.....	28

I. 調査に至る経緯

今回調査を行った鰐淵4号墳他遺跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字鰐淵3009-1番地外に所在する。現地は鰐淵地区内の鰐淵上、下集落後背丘陵上に位置し、鰐淵上集落に属す永明寺地区を分断して立地している。集落内の往来は、従来より徒歩で古墳の所在する現地を山越えするか、車で2km迂回しなければならなく、新たに連絡道を設けることが集落内の人々の長年の要望であった。こうした強い住民の要望に答えるべく、瑞穂町では平成3年度より計画に取りかかり、事業を推進してきた。

ところで、事業計画に先立ち、計画内の遺跡の有無について瑞穂町教育委員会に分布調査の依頼があり、調査の結果、集落後背丘陵地には20基を超える古墳が所在していることが明らかとなった。調査結果を踏まえて遺跡の取扱について、島根県文化課や瑞穂町開発課と協議を繰り返したが、計画路線が永明寺地区を結ぶ最短距離であり、かつ工事による影響を受ける古墳の数がもっとも少ないと、又路線を変更すると計画路線より多くの古墳に影響が出ることが明らかになり、当初計画での工事もやむおえないとの結論に達し、連絡道建設予定地内について発掘調査を実施することとなった。

調査は平成5年9月1日より11月26日にわたり次の調査体制で実施した。

調査主体 瑞穂町教育委員会

調査員 森岡弘典（瑞穂町教育委員会文化財係長）

調査補助員 藤田睦弘（瑞穂町教育委員会主事）

調査指導 河瀬正利（広島大学文学部助教授）

吉川 正（島根県文化財保護指導委員）

川原和人（島根県文化課主幹）

熱田貴保（島根県文化課主事）

事務局 澤田隆之（瑞穂町教育委員会教育長）
山本忠徳（瑞穂町教育委員会教育課長）
星野暢子（瑞穂町教育委員会課長補佐）
佐藤 勝（瑞穂町教育委員会課長補佐）

発掘作業 石川義明、岩根 諭、井坂楨子、植田義雄、上川義夫、上田民子、漆谷 勉、大畑清美、尾糖文江、国信勇之信、洲浜軍太郎、田中繁人、高橋一男、高川秀夫、戸津川孝夫、戸津川里美、富永ナカヨ、平川正寅、日高フミエ、日高スエノ、久光花枝、松島利郎、三上福三、三上 覚、森田ユキエ、吉永久子

整理作業 上木和枝、石橋貴美子（瑞穂町教育委員会）

なお、調査に当たって西尾克己氏（島根県埋蔵文化財調査センター）、桑野直夫氏、木邑恂氏、富永公美氏、山本史朗氏、三上憲昭氏、井坂猛氏、奥田真隆氏（以上瑞穂町文化財保護審議会委員）、大谷晃二氏（浜田高等学校教諭）、今田修二氏（旭町教育委員会）、振井久之氏（大和村教育委員会）、中田健一氏（石見町教育委員会）、田村道三氏（広島県大朝町教育委員会）の方々から広範なご教示をいただいた。また、岡田恒喜氏、伊藤宣之氏、日野康弘氏、小田道子氏（以上瑞穂町開発課）、森脇一昭氏、森脇敏則氏、酒井律也氏（以上有限会社森商建設）、野田昭三氏（前土地所有者）には、発掘調査を円滑に進めるため多大なご配慮とご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

（森岡弘典）



第1図 瑞穂町と鎌瀬古墳群位置図（△鎌瀬古墳群、○印役場）

II. 鰐淵古墳群の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置する。南西には中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。町域のほぼ中央を出羽川が東流し、その出羽川に向かって亀谷川、岩屋川、円の板川などの支流が注いでいる。出羽川とその支流の流域には沖積地や河岸段丘が形成されている。特に瑞穂町田所から出羽にかけての出羽川の両岸には河岸段丘が発達し、段丘の間には出羽盆地が広がっている。中でも出羽盆地の中央付近には規模の大きな河岸段丘が形成され、段丘上の平坦面には集落がつくられている。

鰐淵古墳群は北側の段丘上に鰐淵集落後背部の丘陵尾根に広がる古墳群で、古墳の総数は20基以上であると思われる。古墳群がある丘陵尾根からは出羽盆地の大部分が望まれ、出羽川を隔てて対岸には弥生時代から平安時代にかけての山間まれにみる大遺跡として知られている長尾原遺跡を見おろすことができる。また、本古墳群に隣接して丘陵の西端部には御華山古墳群、三沢谷川を挟んで東側には淀田古墳群がある。

瑞穂町は遺跡分布調査がすでに終了しており、分布調査終了後に明らかになったものを含めて550以上の遺跡が確認されている。その半数以上の約300カ所が製鉄関連遺跡であるが、横道遺跡をはじめとして旧石器時代から歴史時代にいたる幅広い時代の遺跡の存在が知られている。

旧石器時代の遺跡は、横道遺跡（高見）、荒槻遺跡（岩尻）及び堀田上遺跡（市木）の3カ所が知られている。横道遺跡からは姶良Tn火山灰の下から流紋岩製の石核、剥片類が出土している。⁽¹⁾ 荒槻遺跡では安山岩製の尖頭器状石器と削器が表面採取されている。また、堀田上遺跡からも流紋岩製のナイフ形石器、凸形様石器及びスクレイパーなどが出土している。⁽²⁾

続く縄文時代の遺跡としては、以前より横道遺跡、長尾原遺跡（淀原）、大畠遺跡（大草）及び大字根遺跡（伏谷）⁽³⁾ が知られていたが、近年行われた中国横断自動車道広島浜田線建設に伴う発掘調査により新たに郷路橋遺跡（市木）、今佐屋山遺跡（市木）⁽⁴⁾、堀田上遺跡⁽⁵⁾の存在が明らかになった。また、1992年に調査された川ノ免遺跡（山田）⁽⁶⁾からも押型文土器が出土している。⁽⁷⁾

弥生時代では、石堂遺跡（谷川）、川ノ免遺跡、淀原遺跡（淀原）、長尾原遺跡、順庵原遺跡（下龜谷）、野田西遺跡（上龜谷）、牛塚原遺跡（上龜谷）、堀田上遺跡などがある。

淀原遺跡、順庵原遺跡、牛塚原遺跡、堀田上遺跡からは弥生時代前期の土器が出土しており、山間地域でも弥生前期から農耕が始まっていたことを示している。弥生時代後半になると遺跡数も増加し、出土遺物も豊富になってくる。人口も増え、それを支える農耕も町域全域で広く行われていたと考えられる。こうして社会が安定し物質的に豊かになるに従い、弥生社会も階層分化していくのであろう。

その結果、弥生時代終末期になると共同体の首長墓と考えられる順庵原1号墳墓（下龜谷）及び御華山墳墓（鱗淵）が築造された。順庵原1号墳墓は出羽川南側の河岸段丘上にあり、わが国で初めての四隅突出型墳墓の調査事例となった。また、御華山墳墓は鱗淵集落後背部の丘陵上にあり、鱗淵古墳群の西に隣接している。この墳墓は封土がなく、縦2.8m横1.3~1.5mの墓坑内に箱式石棺がつくられており、内には頭骨、上腕骨等が残っていた。

古墳時代の遺跡のうち、集落跡としては狼原遺跡（和田）、宇山遺跡（上原）、川ノ免遺跡、長尾原遺跡、順庵原遺跡、今佐屋山遺跡などがある。このうち、1968年に調査された長尾原遺跡からは竪穴住居跡や土坑墓が検出され、さらに鉄に関する遺構が発見された。⁽⁹⁾また、1989年に調査された今佐屋山遺跡からも竪穴住居跡と製鉄遺構がみつかっており、⁽¹⁰⁾製鉄・鍛冶が占墳時代後半には始まっていたことを示している。

古墳は20カ所以上が確認されているが、その大部分は終末期に築造された小円墳と横穴である。前半期の古墳と思われるのには段ノ原古墳（高見）、淀川古墳群（三日市）及び御華山古墳群がある。

町内の古墳についてはほとんど発掘調査が行われておらず、資料としては露出している石室及び石棺の実測図のほか、採取された土器や装飾品があるだけである。

増屋横穴（下田所）からは勾玉や切小玉、耳環、そして管玉が採取されているが、いずれも古墳時代末期の特徴を有している。

江追横穴群は出羽川の南側の河岸段丘上の丘陵地にあり、1972年草地造成工事中に発見され、調査の結果3基の横穴が確認された。出土した副葬品には、須恵器や土師器のほか、耳環、勾玉、直刀、鉄鎌等があり、古墳時代後半期の特徴を備えて

い
る。

このほか、古墳時代から奈良、平安時代にわたる須恵器の窯跡も数多く確認されている。久永古窯跡群はその代表的な遺跡で、18基以上の窯跡で構成されている島根県内有数の須恵器产地であったといえる。

中近世になると、山城や砦跡、そして多くの製鉄遺跡が確認されている。なかでも鎌倉時代に富永（出羽）氏が築城したと伝えられ、出羽盆地を北から見おろす二ツ山城は規模、構造とも県内では屈指の城跡であり、瑞穂町のシンボルとして広く町民に知られている。

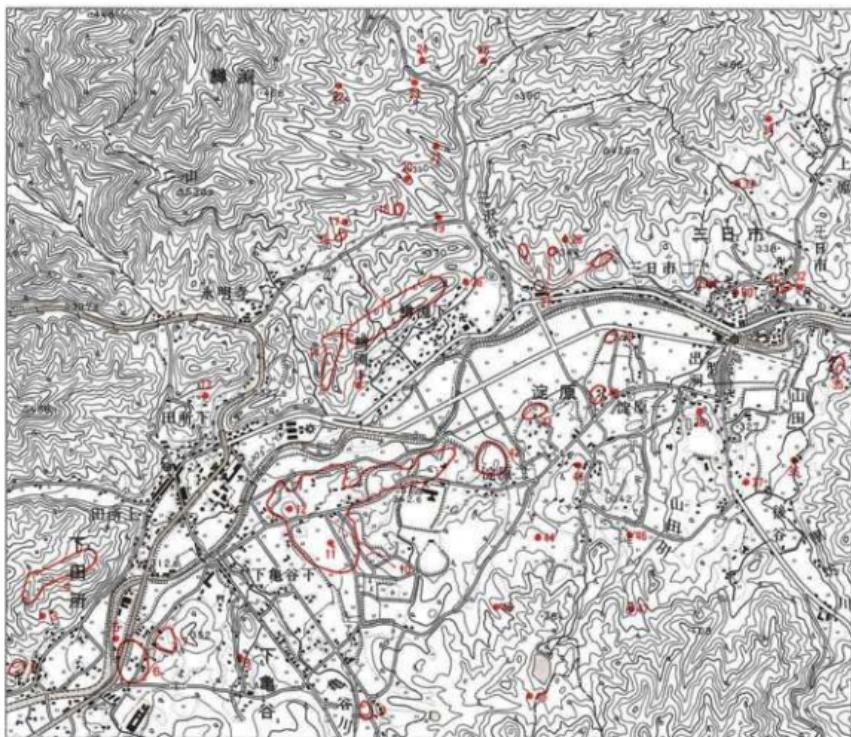
また、中近世の製鉄遺跡は300カ所近くが確認されており、製鉄が盛んに行われていたことを示している。

（藤田睦弘）

註

- (1)瑞穂町教育委員会『横道遺跡・詳細分布報告書』 1983年
- (2)吉川直『瑞穂町の遺跡』『瑞穂町誌』第3集 瑞穂町教育委員会 1976年
- (3)島根県教育委員会『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 桐田上、今佐
　巣山 米屋山遺跡の調査 1991年3月
- (4)(2)と同じ
- (5)鳥取県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1991年3月
　同上、IV 1992年3月
- (6)(3)と同じ
- (7)瑞穂町教育委員会『川ノ免遺跡発掘調査概要書』 1992年6月
- (8)瑞穂町教育委員会『御幸山彌生式墳墓調査概要』 1969年2月
- (9)鳥取県川本農林土木事務所『農免道路新設に伴う兵尾原遺跡及長尾原一号墳調査概要』 1969年2月
- (10)(3)と同じ
- (11)(2)と同じ
- (12)(2)と同じ

なお、上記参考文献以外に『瑞穂町誌』第1集（1964年）、第2集（1966年）、第3集（1976年）、および『瑞穂町内遺跡分布図』（I～V 1985、1986、1990、1991、1992年）を参考にした。



第2図 鯉瀬古墳群付近遺路分布図（1：25,000）

- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 1. 鯉瀬古墳群 | 18. 馬場ヶ谷B遺路 | 33. 桜谷遺路 |
| 2. 神宮遺路 | 19. 馬場ヶ谷A遺路 | 34. 宇山窓跡 |
| 3. 南古跡群 | 20. 馬場ヶ谷窓跡 | 35. 川ノ内遺路 |
| 4. 南古跡群 | 21. カニケ追遺路 | 36. 小谷遺路 |
| 5. 順庵原塚群 | 22. 桜ヶ谷窓跡 | 37. 鉄穴内遺路 |
| 6. 順庵原B遺路 | 23. 定入窓跡 | 38. 旅行村グランド窓跡 |
| 7. 順庵原A遺路 | 24. 定入遺路 | 39. 小絵堂窓跡 |
| 8. 牛市原遺路 | 25. 上菅窓跡 | 40. オセド遺路 |
| 9. 杉谷遺路 | 26. 原下遺路 | 41. 淀原遺路 |
| 10. 長尾原遺路 | 27. 渋田古墳群 | 42. 若林遺路 |
| 11. 長尾原B古墳 | 28. 石井追窓跡 | 43. 淀原古墳 |
| 12. 長尾原A古墳群 | 29. 蛇池遺路 | 44. 江迫横穴群 |
| 13. 増屋横穴 | 30. 崇聖寺原遺路 | 45. 江迫窓跡 |
| 14. 御華山古墳群 | 31. 宮ヶ谷遺路 | 46. 沢陸遺路 |
| 15. 竹前遺路 | 32. 七神社社務所裏 | 47. 滝ヶ谷窓跡 |
| 16. 清水ヶ尻遺路 | 石楠墓群 | 48. 鉄鉢窓跡 |
| 17. 清水ヶ尻窓跡 | | |

III. 調査区の概要

邑智郡瑞穂町田所地区鱗淵集落背後の丘陵尾根に所在する鱗淵古墳群は、20基以上の古墳からなる瑞穂町で最大規模の古墳群である。今回の発掘調査は古墳群の東端付近で実施し、箱式石棺3基を有する方墳1基、土坑6基、溝状遺構等を検出した。以下その概要を報告する。

1. 【4号墳の調査】

東西に延びる調査区の東端に所在し、墳丘の標高は354.68mで本調査区内で最も高い所に位置する。分布調査で東西約11m、南北約10mのマウンドが認められ、トレンチ調査の結果、埋葬主体の一部が確認され、古墳であることが判明した。発掘調査の結果、墳丘内で3基の箱式石棺が検出された。

(I) 墳丘の調査(第3・5・8図、巻頭図版、図版第2a～7a)

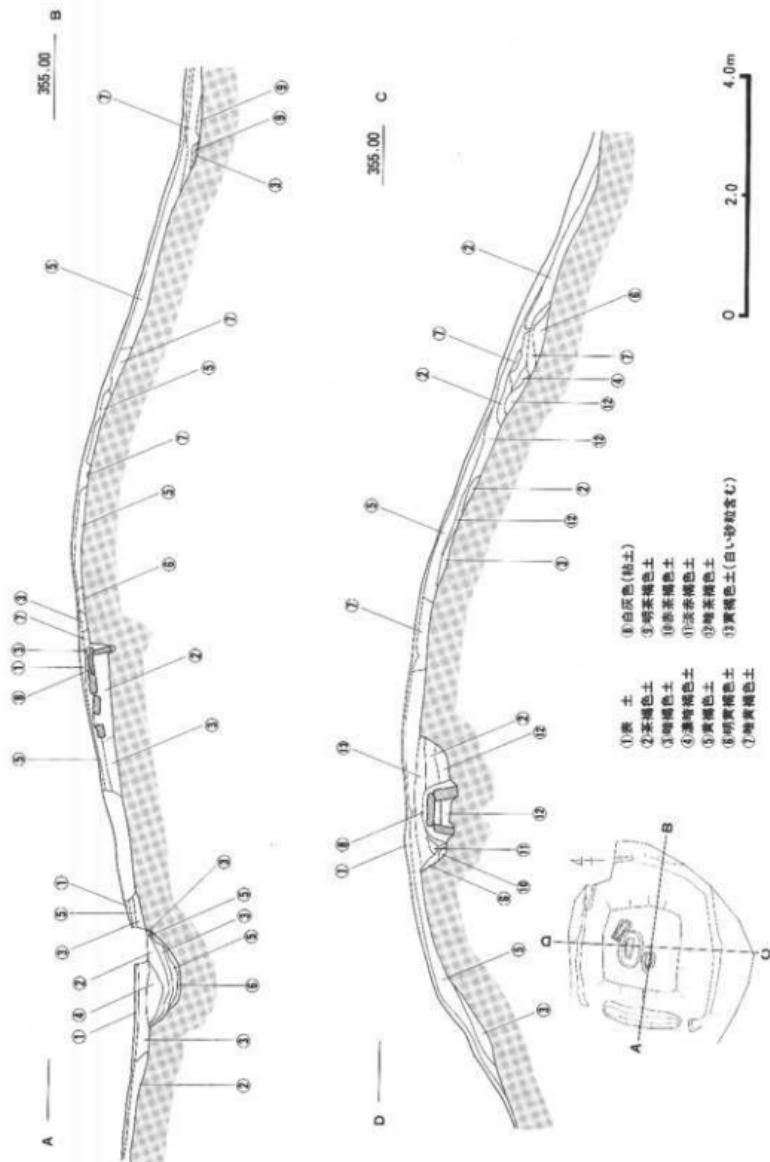
墳丘の西側で東西方向に延びる尾根筋を南北に断ち割った長さ7.0m、幅1.4～1.5m、深さ0.5mの周溝を検出した。周溝は北端で浅くなり消滅するが、南端では完全に尾根を分断せず、地山を残してつくられた長さ1.0m、幅0.7mの上構状の遺構で画されている。また周溝西側中央でピット1ヶ所を検出した。ピットは長径20cm、深さ30cmであるが性格は不明である。

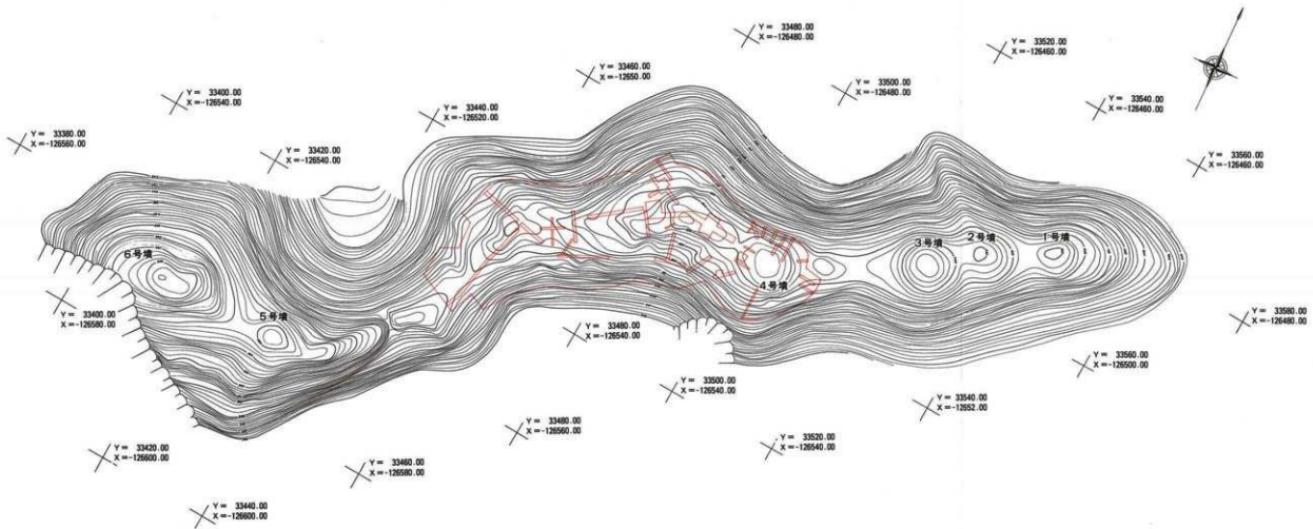
墳頂部から北側約1.5m、南側2.0m下で、直接地山を削り出してつくられた幅約0.3～1.0m程度のテラスが北側、東側、南側をコの字形に廻っている。墳丘の北東部コーナー付近ではテラスの延長線上がわずかに掘り込まれている。東側に明確な周溝が設けられていたか否かは不明であるが、調査区外に設けられている可能性も考えられ墓域の確定はできなかった。墳丘の規模は東側テラスから周溝の墳丘側上端までが13.4m、北側テラスから南側テラスまでは12.8mで、墳形は東西がやや長い方墳である。

墳丘盛土の遺存は少なく表土の下に10～25cm程度の厚さで黄褐色土層、暗黄褐色層が確認されたのみで築造当時の盛土の多くは流失したものと思われる。

3基の箱式石棺の掘り方はそれぞれ表土下の黄褐色土層では認められず、地山上面で検出されたが、3号石棺については西側の掘り方が消滅しているので、一部盛

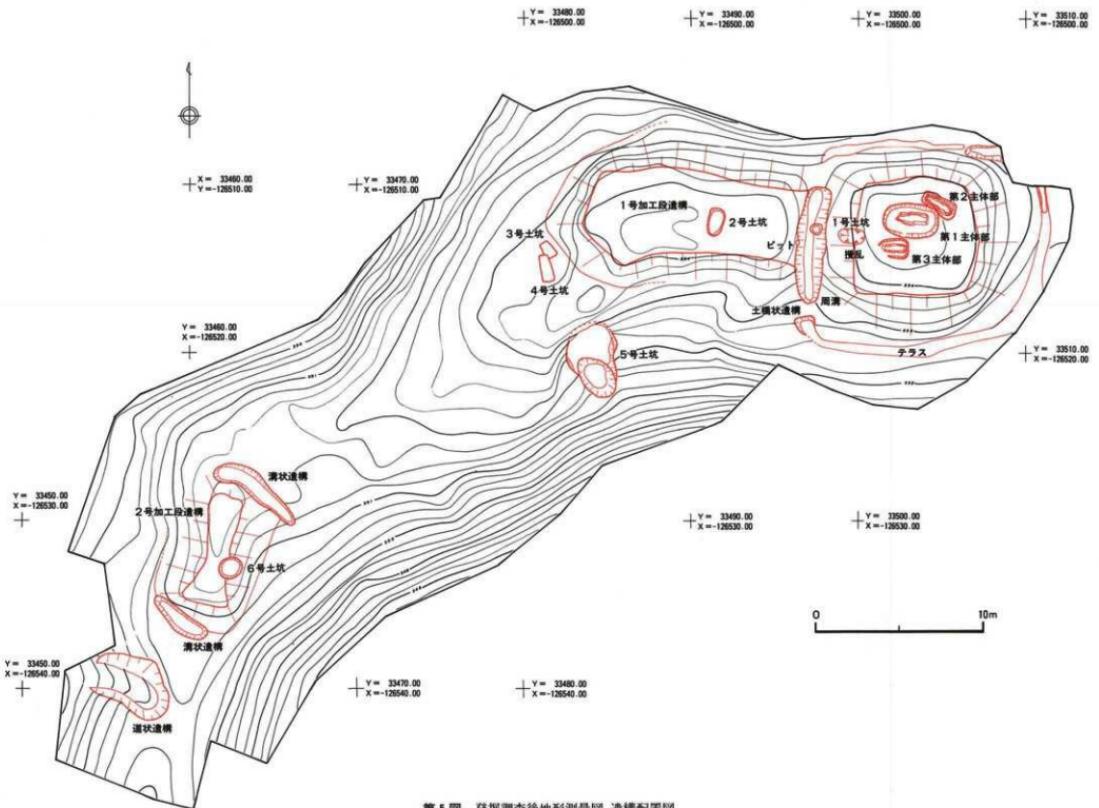
第3図 埋立て4号填坑丘断面図





第4図 発掘調査前地形測量図

0 20 40m



第5図 発掘調査後地形測量図、柵構配置図

土内に掘り込まれていたと思われる。

墳丘の築造を復元すると、元の地形を最大限有効に使い加工掘削が行われ、地山面が削りだされ、墳頂部に東西約7.4m、南北に約6.8mの平坦面がつくられた後、地山面に掘り方をつくり箱式石棺を構築した後、被葬者を安置し、黄褐色土等により埋土や盛土がなされたと推定される。遺物は周溝内埋土や表土より須恵器片3点、墳丘盛土内より土器の細片が出土した。

(2)埋葬施設の調査

3基の箱式石棺を検出した。便宜上最も大きいものから順次第1主体部、第2主体部、第3主体部とした。

第1主体部（第5～8図、巻頭図版、図版第7b～13a）

第1主体部は墳頂中央よりやや北側に位置し、検出された3基の石棺の中では最大の規模で、石材の加工も最も丁寧におこなわれていた。

第1主体は第2主体と切り合い関係にあり、第2主体を切って第1主体がつくられている。規模は長さ3.3m×幅2.1mで平面形は橢円形を呈し、深さ0.4～0.45mで地山を東西58～60°、南北40～61°の傾斜で掘り込こんでいる。その底部には北、東、南の壁にはば平行に「く」字形と「L」字形に溝が堀られており、それぞれの長さは1.7～2.4m幅0.16～0.4m、深さは0.05～0.17mで、この溝は南北両側壁および東側の小口石を据えるために掘られたものである。

箱式石棺の大きさは、石棺内側で長さ1.66m、幅は東側小口部0.41m、中央部0.46m、西側小口部0.28m、深さは0.24～0.3mで頭位は東側である。主軸はE15°Sを指す。

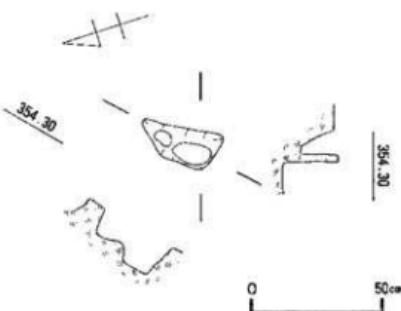
側壁は北側が2枚、南側が3枚で構成されている。それぞれ板状に加工された花崗岩で、北側壁は長さ1.08×高さ0.35m、0.50×0.29m、南側壁は0.80×0.45m、0.69×0.38m、0.18×0.30mで、厚さは約0.19m、0.14m、0.10m、0.19m、0.13mである。また、側壁は蓋石を水平に据えるために北側に比して南側壁の掘り方が深くなっている、それぞれ11～24°内傾している。

小口石はほぼ垂直に据えられ、東側で幅59cm、高さ34cm、厚さ11cm、西側小口石は幅56cm、高さ33cm、厚さ8cmである。東側小口石は加工されて整っているが、西側小口石は石材も薄く粗雑である。東西小口石は両側壁に立て掛けるように据えられているが、地山を掘り込んで据付けられている東側小口石に対して、西側は側壁に立て掛けられているだけである。

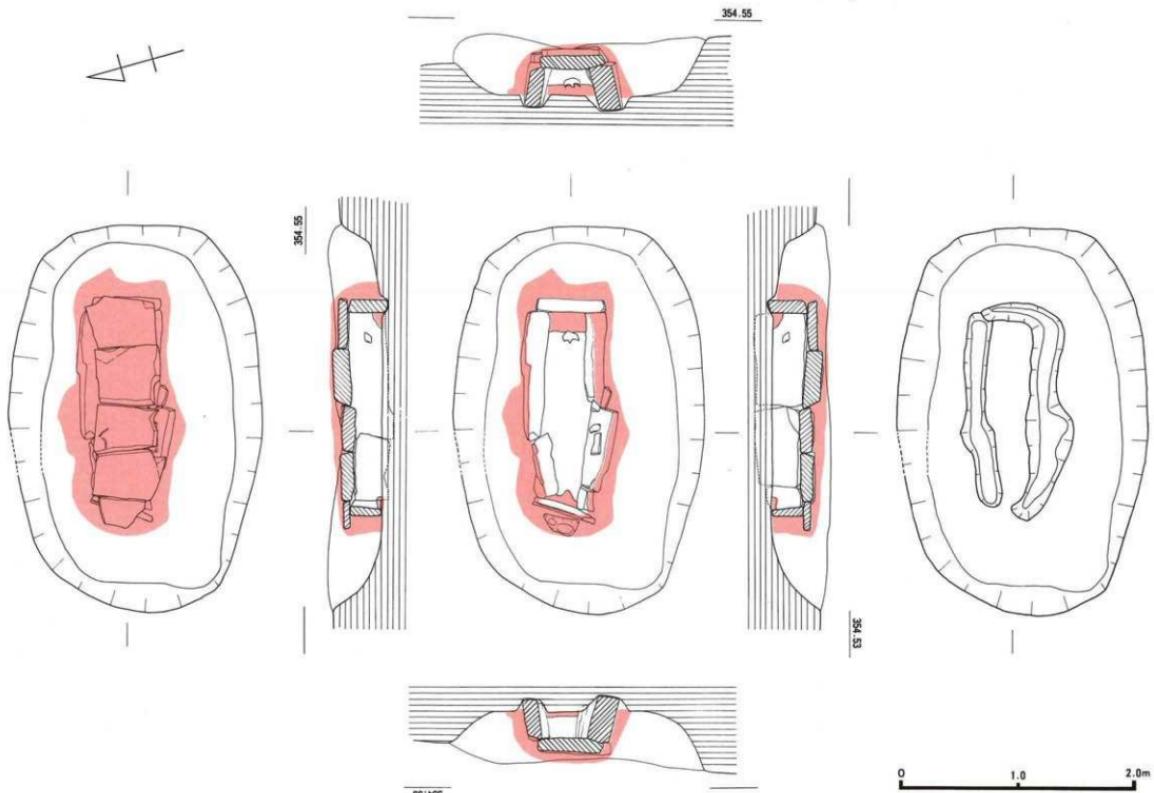
石棺内部には粒子の細かいバサバサした暗茶褐色砂質土が14~15cm程度堆積していた。その中から成人女性と推定される黒褐色を呈した頭骨の一部が出土したが、遺存状態が非常に悪く、眼窓より上部の前頭部の一部が残っている程度で、赤色顔料や副葬品は検出できなかった。頭骨の下部で東側小口石に接して灰白色粘土でつくられた長さ41cm、幅18cm、高さ8cmの枕が有り、中央部を半月状に凹めている。この凹みは頭部を安定させるためのものであると推定される。また、西側小口石に接して枕と同質の粘土塊が検出された。粘土には2ヶ所踵状の凹みが認められ、納棺された埋葬者の足元を固定させるため詰めたものと考えられる。粘土枕の凹みから踵痕までは148cmで、ほぼ埋葬者の身長に等しいと思われる。

石棺は良質の灰白色の粘土で完全に被覆されており、厚いところで20cm、薄いところで2~3cm程度の厚さである。西側小口石の外側は厚さ約18cmの粘土で覆われていて、その粘土を掘り込んでつくられた最大長32cm、幅14~15cmの台形を呈した副室と推定されるピットを検出した。ピットは二段に掘られておりそれぞれ深さは10cmと14cmで、少し締まった感じのする暗茶褐色土が入っていたが、副葬品等は検出されなかった。

蓋石は5枚で、それぞれ加工された花崗岩を使用し、東側から4枚目まではほぼ方形に加工されて整っているが、5枚目の台形を呈している蓋石は粗雑である。大きさは東側から順に最大長45×最大幅60cm、51×55cm、42×53cm、43×59cm、22×39cm、厚さはそれぞれ8cm、14cm、13cm、10cm、6cmである。また、2枚目から5枚目の蓋石を水平に保つため、南側壁上に3個、北側壁上に1個、西側小口石上に1個小石が置かれていた。蓋石は配石の状態から頭位の方から順次架構されたようであるが、石棺本体の蓋石は4枚目までで5枚目は副室の蓋石のようである。蓋石の配置が終了すると側壁や小口と同様灰白色の粘土で隙間なく覆い、掘り方内を黄褐色土で埋め戻していたと思われる。



第6図 第1主体部副室実測図



第7図 4号墳第1主体部箱式石棺実測図 (アミ目は粘土)

第2主体部（第5・8・9図、巻頭図版、図版第13b～16b）

第2主体部は第1主体部の北東側に位置し、第1主体部の掘り方により切られており、埋葬施設がつくられた時期は第1主体部より古いと考えられる。

規模は長さ2.1m、幅は切られており不明であるが推定0.9mで平面形は隅丸長方形を呈している。深さは約0.3mで60°～96°の傾斜で地山を掘り込んでいる。また底面には四方の壁にはほぼ平行して直線的な溝が掘られており、場所によっては溝の中をさらに堀込んでいるところもある。溝の長さは0.3m～2.2m、幅0.13～0.23m、深さ0.05m～0.23mで、その中に箱式石棺を構築している。石棺の構造から頭位は南東側と推定され、主軸はE54°Sを指す。

箱式石棺の石材は、すべて川石等の自然石をそのまま使用するか一部を加工して構築されており、大きさは石棺内側で1.55m、南東側小口部で幅0.32m、中央部で0.35m、北西側小口部で0.32mである。

小口石は南東側が幅25cm、高さ32cm、厚さ11cm、北西側が幅cm、高さ31cm、厚さ12cmで両方ともほぼ垂直に据えられている。

側壁は北東側が6枚、南西側が5枚で構成されており、北東側は長さ20～40cm、高さ26～43cm、厚さ7～14cmの不定形な石を使用している。南西側は長さ23～40cm、高さ28～35cm、厚さ5～14cmで北側に比べて大きさも比較的整っている。両壁とも約10°～12°内傾している。

石棺内は軽い感じの黄褐色砂質土が蓋石下まで堆積していたが、人骨や副葬品は検出できなかった。

蓋石は6枚で不定形ながら同じような自然石を使用している。大きさは長さ25～40cm、幅44～57cm、厚さ10～17cmで、配石の状態から頭位側から順次架構されたと推定される。なお、蓋石の1部に青灰色の粘土による被覆が認められた。

第3主体部（第5・8・10図、巻頭図版、図版第17a～19b）

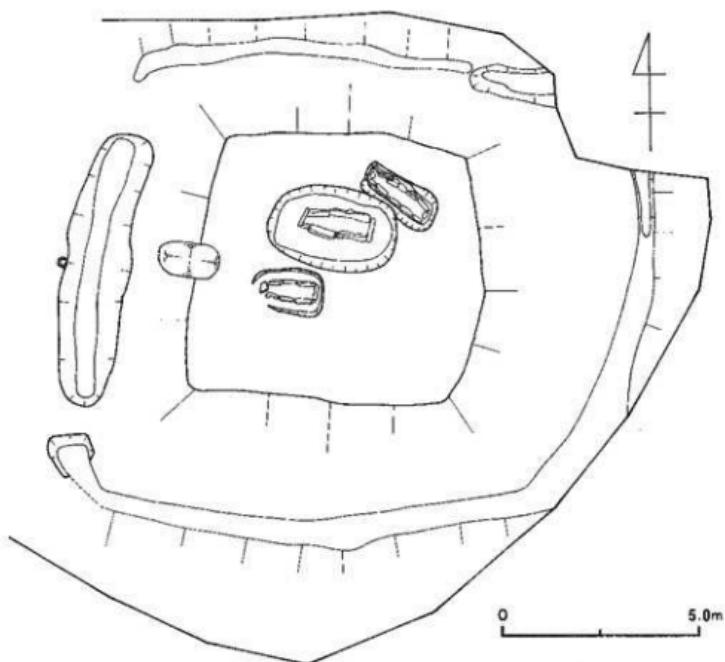
第3主体部は第1主体部の南側に位置し、検出された主体部の中では最小の規模で被葬者は子どもと推定される。掘り方の南西側は検出できず、長さが約1.75m、幅1.18mで平面形は東側がやや広い隅丸長方形である。深さは遺存状態の良い東側で18cm、北側で13cmで地山を49°～77°の傾斜で掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で北、東、西の壁に平行に直線状または「L」字に溝が掘られているが、西側については検出できなかった。長さは、1.20～1.54m、幅0.11～0.21m、深さ0.06m～0.

17mである。石棺は花崗岩の切り石を使用して構築しているが西側が欠損しているので長さは不明である。幅は東側小口部0.34m、中央部0.36m、深さ0.2mで長方形を呈し、主軸はE13°Sを指す。

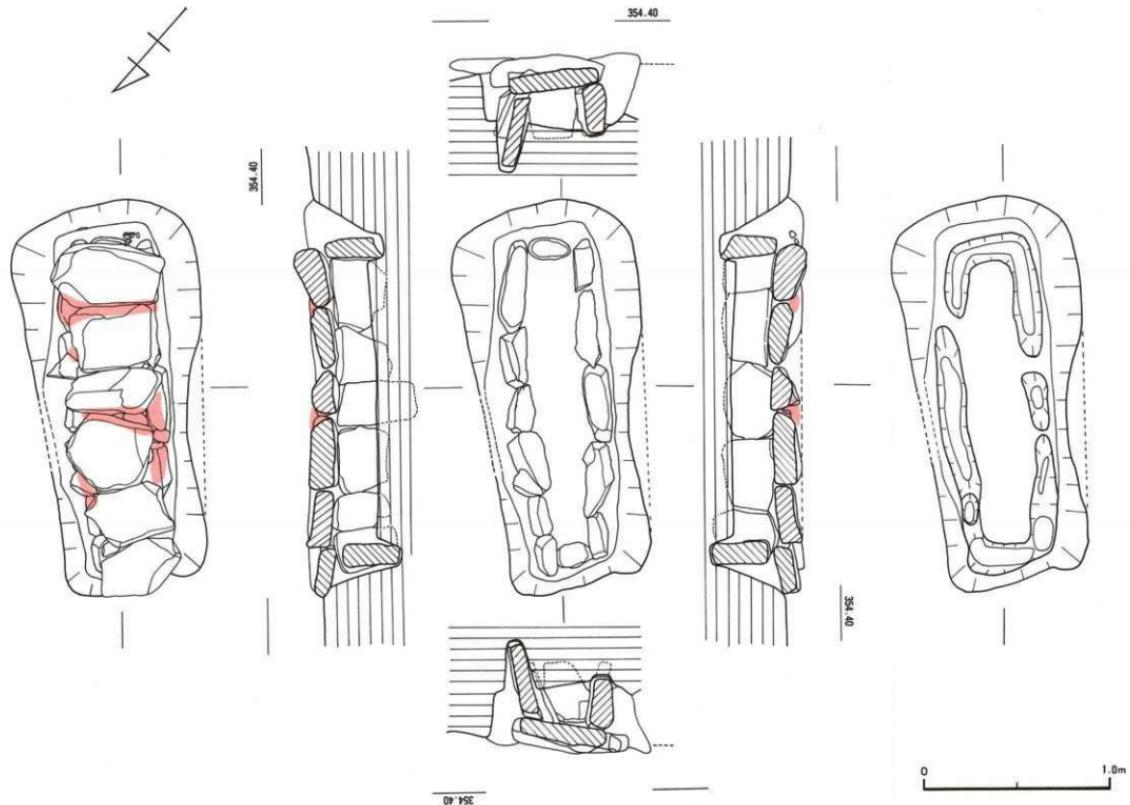
小口石は東側幅37cm、高さ30cm、厚さ9cmである。損壊のため西側は不明であるが、石室西側で浮いた状態で出土した長さ24cm、幅20cm、厚さ11cmの角礫が西側の小口石かもしれない。

側壁は北、南とも3枚で長さ29~51cm、幅27~31cm、厚さ6~15cmで最大18°内傾している。

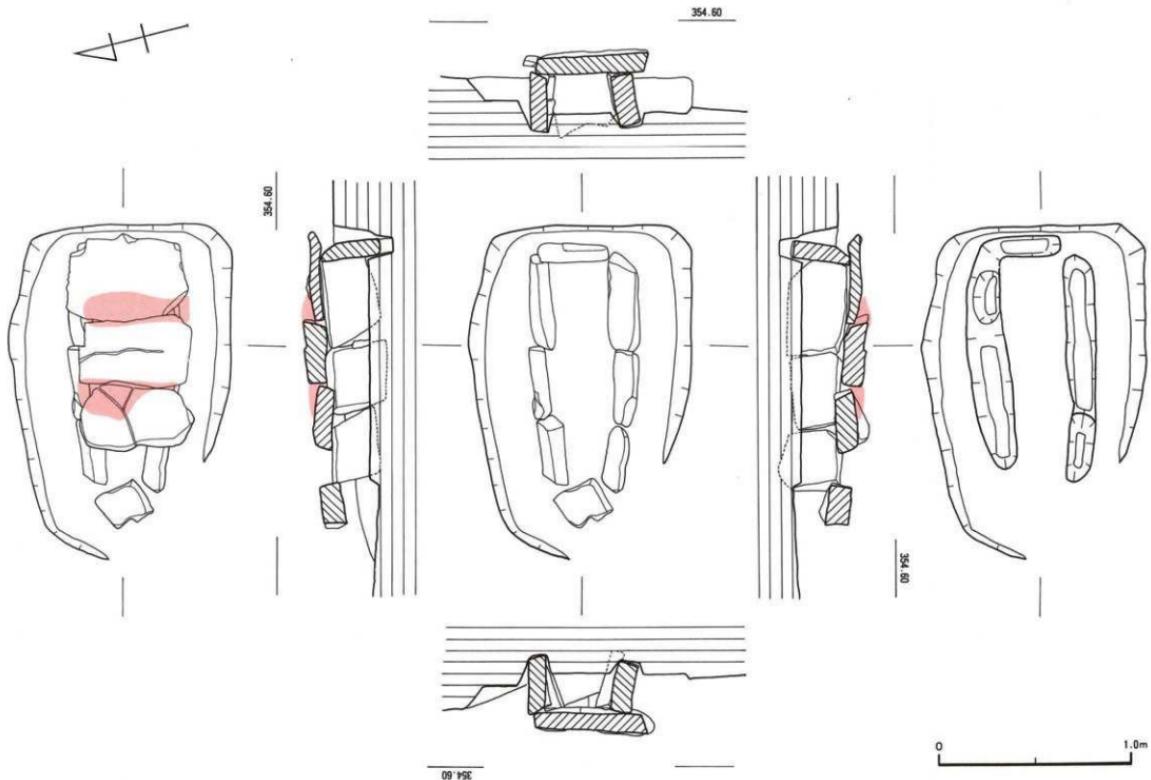
石室内は少し締まった感じの茶褐色土が堆積していたが、人骨や副葬品、赤色顔料は検出されなかった。



第8図 4号墳実測図



第9図 4号墳第2主体部箱式石棺実測図 (アミ目は粘土)



第10図 4号墳第3主体部箱式石棺実測図 (アミ目は粘土)

蓋石は3枚でいずれも加工されたものであるが、東側2枚はほぼ方形で3枚目は不定形で割れていた。大きさは長さ59~64cm、幅35~46cm、厚さ7~11cmで東側より順次架構され灰白色粘土により隙間を日張りした後掘り方を被覆している。

2. 【その他の遺構の調査】

1号土坑（第5・11図、図版第20a・b）

周溝内の堆積土に掘り込まれた土坑で、規模は75×70cm、深さ10cmで平面形は隅丸三角形である。底部はほぼ平らで暗茶褐色土が堆積していた。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、周溝堆積土中に掘り込まれているので、4号墳築造時期より新しいと思われる。

2号土坑（第5・11・13図、図版第21a・b）

4号墳周溝の西側4.5mの尾根上に位置する。規模は長さ1.55m、幅0.82m、深さ0.13~0.17mと浅く、上部が削平されているものと思われる。平面形は隅丸長方形で主軸はN24°Eを指す。底部は平らに掘られており、埋土は暗黄褐色土が堆積していたが遺物は出土していない。

3号、4号土坑（第5・11図、図版第22a・b）

1号土坑の西側9mに位置し切り合っている。3号土坑の規模は長さ1.55m、幅0.50~0.70m、深さは0.10m、底面は平坦である。平面形は東側がやや狭まった隅丸長方形であるが、南北端が4号土坑により切られていた。主軸はE66°Sを指す。

4号土坑は長さ1.55m、幅0.50~0.72m、深さ0.10mで底部は平坦である。平面形は3号土坑と同じく東側がやや狭まった隅丸長方形を呈し主軸はE89°Sを指す。

3、4号土坑とも2号土坑と同じく、後世に上部が削平されたと思われる。なお、遺物は出土していないので時期は不明だが、切り合いの状態から4号土坑が3号土坑より新しいと思われる。

5号土坑（第5・12図、図版第23a~24a）

4号土坑の南3.5mに位置し、丘陵南側斜面に掘り込まれた調査区内最大の土坑である。規模は長さ4.40m、幅は北側2.50m、中央部3.15m、南側1.50mで、底部はほぼ平坦で2段に地山を掘り込んでおり、その段差は0.35~0.46mである。また、残存壁高は0.46~1.65mで平面形は足形をした不整な長方形を呈している。

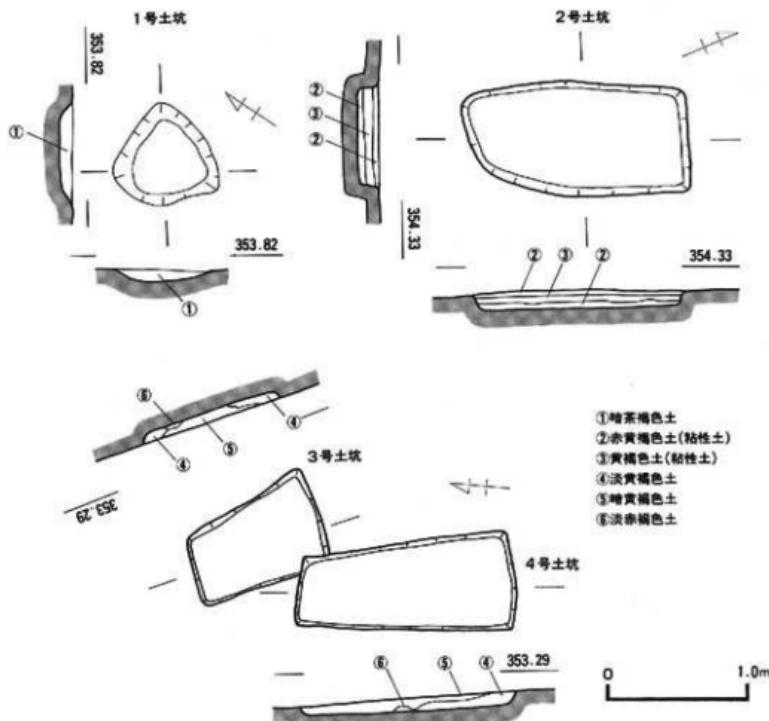
北側と西側の壁はドーム状に掘られ、残存壁上端がオーバーハングしており、当

初は地山を掘り込んで天井が設けられていた可能性もある。

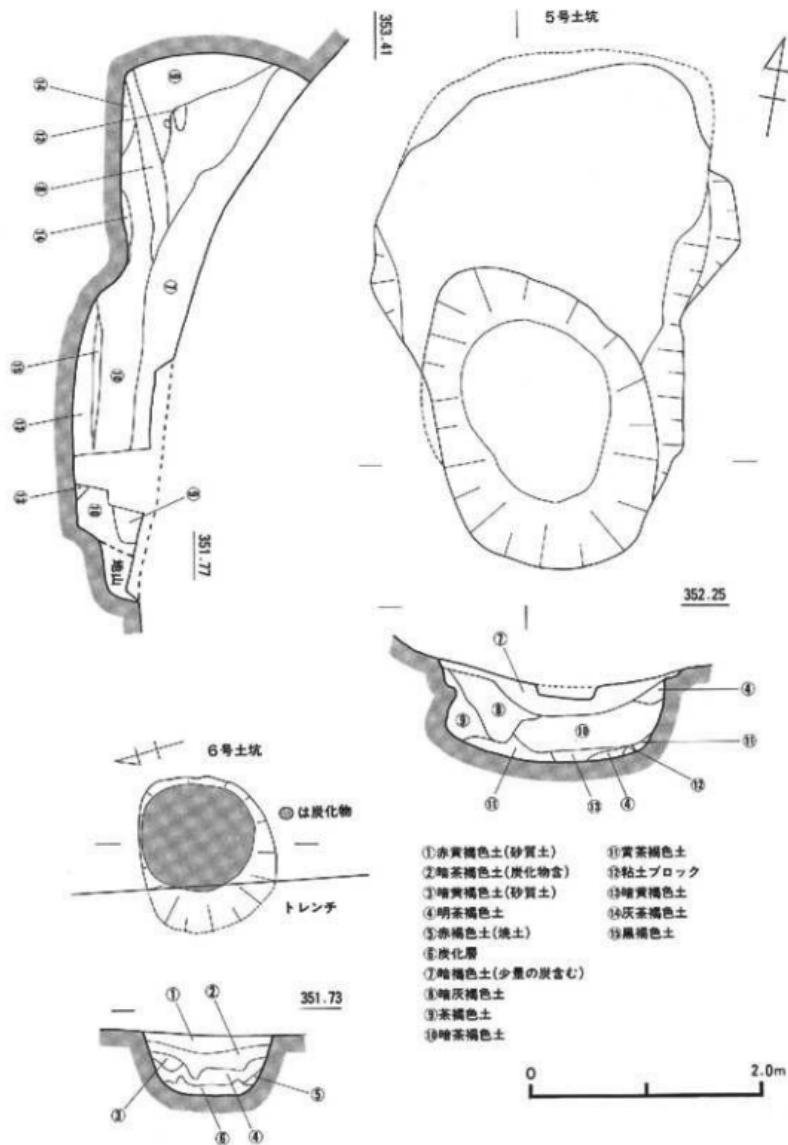
出土遺物は、北側壁付近で鉄製鉄の工程で生じる卵大の鉄滓が1点出土したが、5号土坑内は熱を受けた痕跡や炭化物等は一切検出されなかった。なお、鉄滓以外の遺物は出土していない。

6号土坑（第5・12・14図、図版第24 b・25 a）

4号土坑の南西25mに位置する。試掘溝により一部を欠いているが、平面形はほぼ円形で、規模は直径1.20m、深さ0.53mである。地山面に直接掘り込まれており、底部は鍋底状に中央部がやや深くなっている。炭化物が7~10cmの厚さで堆積しており、底部や壁面の一部が熱により赤褐色を帯びていた。土坑内より遺物は出土していない。



第11図 1号、2号、3号、4号土坑実測図



第12図 5号、6号土坑実測図

1号加工段遺構（第5・13図、図版第25b）

4号墳周溝西側の丘陵尾根上部を削平して造成している。規模は長さ13.0m、幅4.3~5.5mで平坦面はほぼ水平で、西側端部のコーナーを鈍角に削り出している。

平坦面のはば中央部で検出した1号土坑と加工段遺構の関係は不明である。

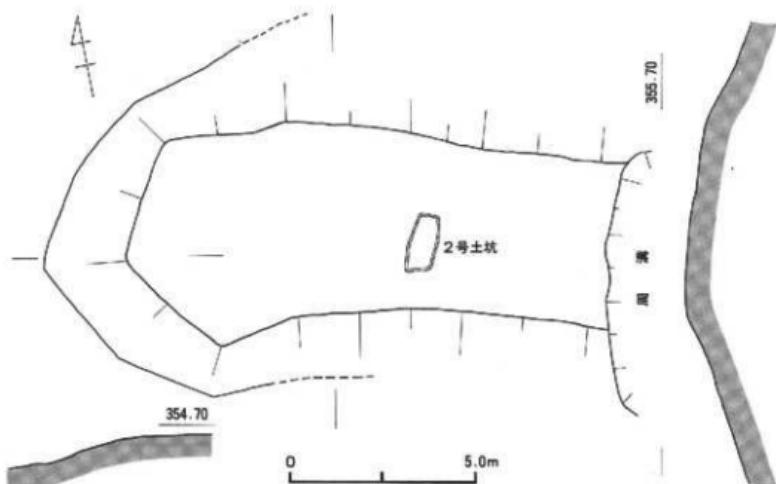
2号加工段遺構（第5・14図、図版第26a）

1号加工段遺構の南西27mに位置し、尾根上部を削平して平坦面を造成している。規模は長さ6.5m、幅1.4~2.8mで中央部がくびれており平面形は分銅形を呈している。平坦面中央部東側で検出した6号土坑との関係は不明である。加工段北側斜面表土中より青磁碗片が1点出土した。

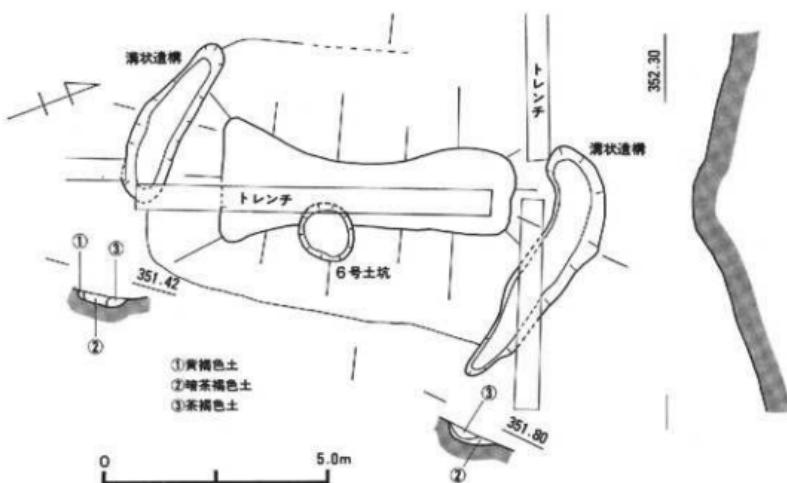
溝状遺構（第5・14図、図版第26b・27a）

2号加工段遺構の南北を囲むように2本の溝状遺構を検出した。それぞれ地山を堀り込んでつくられており、北側の規模は東側が長さ5.5m、最大幅1.2m、深さ0.3mで「く」字形を呈している。

南側は長さ3.8m、最大幅1.2m、深さ0.3mではば直線に掘られている。遺構の性格は不明であるが、その形状から2号加工段の周溝の可能性もある。なお、遺構内から遺物は出土していない。



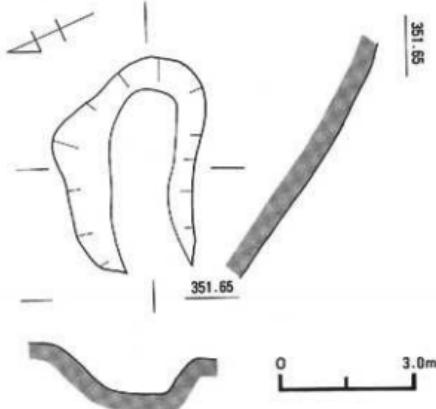
第13図 1号加工段遺構実測図



第14図 2号加工段造構、溝状造構実測図

道路状造構（第5・15図、図版第27b）

南側溝状造構の南西2.5mに位置し、規模は長さ4.8m、幅2.5~3.2m、深さ0.21~0.59mで馬蹄状を呈する。本造構は丘陵尾根の最低鞍部に位置することから、尾根越しの道路があったものと推定されるが時代については不明である。



【出土遺物について】

調査区内より出土した遺物

は非常に少なく、4号墳の墳丘や周溝で須恵器片3点、非常に細片で詳細不明な土器2点が出土した。また、2号加工段造構北東斜面表土中より青磁碗1点が出土した。これらのなかで実測可能な須恵器2点、青磁碗1点を図化し掲載した。

第15図 道状造構実測図

須恵器蓋（第16図1、図版第28a）

墳丘西側の周溝付近堆積土中より出土した須恵器蓋である。口縁部を欠損しているので口径は不明である。天井部は平坦でヘラ削り痕が認められ、中央部には外傾する輪状のつまみが付けられている。胎土は密で焼成は良好である。時期は8世紀後半以降のものであり、この遺物が直接4号墳に伴うものではないが、周溝堆積土内に掘られた1号土坑にかかわるものかもしれない。

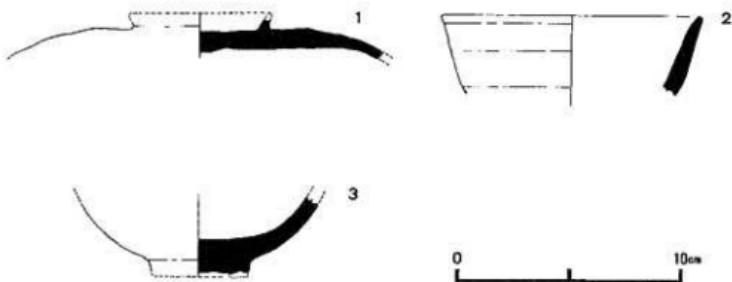
須恵器杯（第16図2、図版第28a）

周溝堆積土より出土した杯である。底部を欠損しているので高台の有無は不明であるが、口径は11.5cmで体部はゆるやかに外傾し、口縁端部はやや丸みを帯びている。胎土は密で焼成は良好である。時期は蓋と同様8世紀後半以降のものと思われる。

青磁碗（第16図3、図版第28b）

2号加工段造構北側斜面表土中より出土した碗底部である。体部より上を欠損しており口径は不明であるが、器肉の厚い底部には高台内を除き淡緑色の釉薬が厚く施釉され全体に貫入が認められる。胎土は密で灰白色を呈し清良である。時期は中世後半と思われる。

(森岡弘典)



第16図 調査区内出土遺物実測図

IV. まとめ

鱗瀬古墳群は丘陵尾根上に築造された古墳群で、分布調査で20基上の古墳が確認されている。今回の農道工事に先立って調査を実施した場所は古墳群の東端にあたる。調査前分布調査では鱗瀬4号墳をはじめ数基の古墳が調査区内に所在すると推定されたが、調査の結果、方墳1基、土坑6、加工段造構2、溝状造構2、道路状造構1を検出した。

以下、発掘調査によって得られた資料の概略についてまとめておきたい。

1. 4号墳について

墳丘の規模は東西13.4m、南北12.8mで形状は方墳である。墳頂部から3基の箱式石棺からなる埋葬施設を検出したが、第1主体部から成人女性と思われる頭骨の一部が出上しただけで、そのほかの副葬品は一切出土しておらず、墳丘の築造時期や、各埋葬施設の構築時期は明らかにすることができなかった。

埋葬施設は、墳頂平坦面のやや北寄りにつくられているが、配置や規模から方墳の主被葬者は第1主体部の被葬者であると考えられる。各主体部の先後関係は、第1主体部の掘り形が第2主体の掘り形を切っており、構築時期は第2主体が第1主体部より古い。また、第3主体部の南西側掘り形が検出されなかつことは、第1主体部墳丘盛土に掘り込まれたためであると考えられ、第3主体部の構築は第1主体部構築の後であると考えられる。

次に、各上主体部の主軸方向と棺材であるが、第1主体と第3主体はほぼ同じで角度で頭位を東に向いているが、第2主体部主軸方向は第1、3主体部より約40°頭位を南へ振っている。また、第1主体部と第3主体部の棺材は花崗岩の切り石で構築されているが、第2主体は川原石等を使用しほんと人工的な調整が施されていない。これらのことから、主被葬者である第1主体部の被葬者と第3主体部の被葬者は、血縁的親族関係にあるかまたはそれに近い関係にあるといえそうであるが、第2主体部の被葬者との関係は不明である。

以上のことから、まず、丘陵尾根上に第2主体部が構築され被葬者を埋葬し、その後第1主体の被葬者を埋葬するにあたり、地形を削平あるいは盛って方墳を築造

し、その後第1主体被葬者の血縁者かそれに近い関係者が第3主体に埋葬されたと考えられる。

箱式石棺の構築で特徴的なものとしては、第1主体部の石棺の小口石の配石方法があげられる。通常検出される箱式石棺の小口石は、側壁に挟まれた形状で配石されており、今回検出した第2、第3主体部の箱式石棺もそうした例であるが、第1主体部石棺の東西小口石は、側壁を塞ぐように配石されていた。特に東側小口石は棺材の中でも最も丁寧に整形されており、その配石方法と合わせ頭位を強く意識して構築されていると思われる。近隣の古墳で、このように小口石を配石し構築された石棺が確認されているのは管見するかぎりでは今のところ、石見町大坪山2号墳⁽¹⁾、那賀郡旭町山ノ内33号墳⁽²⁾、広島県山県郡千代田町中出勝負峠7号墳⁽³⁾の3例である。このような小口石の配石方法は類例が少なく、地域的特徴なのか、あるいは葬送儀礼に關係するものなのか不明であり、今後の調査の蓄積に期待したい。

さて、4号墳の築造年代であるが、築造年代を決める遺物の出土が皆無であり近隣の調査例をてがかりに築造時期を考えてみたい。

隣接する那賀郡旭町の山ノ内古墳群の調査では、箱式石棺を埋葬施設とする方墳や円墳が検出され、調査区内周溝より出土した須恵器の特徴からこれらの築造時期を5世紀後半～6世紀前半に比定している。⁽⁴⁾また、小口石で側壁を塞ぐ形状の箱式石棺を有する石見町大坪山2号墳の築造時期も5世紀代と推定されている。近隣の広島県山県郡千代田町中出勝負峠5～7号墳の箱式石棺も広島県内の他の類例と比較検討し、築造時期を5世紀前半から中葉に比定している。⁽⁵⁾

これらの古墳はいずれも丘陵尾根上に位置し、尾根を断ち割って墓域を決定し墳丘を築造している。また箱式石棺の傾向として、側壁は頭位側が比較的長く、足位へ行くに従って短くなる。蓋石や小口石も頭位側に比して足位側が小さくなる傾向にある。また、蓋石や側壁などの隙間を粘土で目張りを施している。これらはいずれも鱗淵4号墳の立地や箱式石棺の特徴と共通している。

この様な傾向の共通性と数少ない資料だけで4号墳の時期を推定するにはいささか問題があるかもしれないが、以上のことから鱗淵4号墳は5世紀前半から6世紀にかけて築造されたものと推定される。

2. その他の調査

1号土坑は周溝堆積土に埋込まれており、明らかに4号墳築造後につくられた土坑である。時期は土坑周辺で出土した須恵器により8世紀後半と思われるが性格については不明である。2、3、4号土坑は削平されており、壁が僅かに遺存しているだけで遺物の出土がなく時期や性格は不明である。5号土坑は斜面に掘り込まれた調査区内最大規模の土坑である。調査当初は横穴墓の可能性も考えたが、それにつながる遺物等は一切出土しなかった。また、須恵器窯や炭窯の可能性も検討したが、炭化物や焼土も検出されなかったため、その性格や時期については不明である。唯一の遺物として、土坑底部付近で鉢製鉄の工程で生じる鉄滓が1点出土しているが、本遺跡付近には鉢製鉄遺跡は所在せず、なぜ土坑内から出土したか不明である。6号土坑も性格や年代を確定する遺物は出土しなかったが、底部から多量の炭と焼上面検出された。類例の調査例では、中国横断自動車道の工事に先立って調査された後河内9号古墓⁽⁷⁾があり、本土坑も9号古墓同様火葬に関するものかもしれない。

加工段遺構は2ヶ所検出されているが性格や時期は不明である。2号加工段遺構の両側には尾根を断ち切るように溝状遺構がほられており、2号加工段はもともとは古墳であり後世に削り取られた可能性が強い。2号加工段遺構南側斜面の土層観察によると、表土から順に暗黄褐色土（堆積土）、暗茶褐色土（旧表土）、明茶褐色土、茶褐色土、地山と統一している。このことから少なくとも1回以上人工的に地形に加工が加えられていることが確認された。その時期が古墳が築造された時期かそれ以前かは確たる根拠はないが、旧表土上の堆積土量が多いことから推定して、古墳築造以後に大規模な地形の改変があり、そのとき1号加工段、2号加工段遺構がつくられたのではなかろうか。

おわりに

今回の調査は、農道改良工事に伴う発掘調査という限られた範囲での調査であり、鱗渕古墳群の全容を明らかにすることはできなかったが、古墳時代中期の方墳の構造の一端を明らかにことができ、当地方の古墳時代の墓制を考える上で貴重な資料を得ることができた。しかし、今回の調査で、性格や時期を明らかにすることができなかった土坑や加工段遺構の検討について課題が残った。今後の類例の

蓄積により再検討を加えていきたい。

なお、調査終了後、箱式石棺は全て解体し棺材は瑞穂町郷土館において保管している。近日中に復元し公開するつもりである。

(森岡弘典)

註

- (1)石見町教育委員会『石見町誌』 1972年
- (2)旭町教育委員会今田修二氏のご教示による
- (3)広島県埋蔵文化財調査センター『巣ノ持遺跡群、中出勝負師墳墓群』 1986年3月
- (4)(2)と同じ
- (5)鳥根県文化財保護指導委員吉川正氏のご教示による
- (6)(3)と同じ
- (7)鳥根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』 1992年3月

付 論

鱗淵4号墳より検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井 上 貴 央

1. はじめに

本報告は、島根県邑智郡瑞穂町の鱗淵4号墳第1主体部から検出された人骨に関するものである。

人骨の保存状況はきわめて悪く、骨から得られた情報も少ないが、検出入骨の特徴について述べたい。なお、本人骨は調査団の発掘にともなって発見されたものであり、人骨の取り上げも調査団の手によってなされ、後日筆者のもとに同定を依頼されたものであって、骨の検出状況については調査担当からの聞き取りによるものであることをお断りしておく。

2. 骨の検出状況

本人骨は、東西に長軸方向を有する箱式石棺から検出されたものである。石棺の蓋石は5枚の石からなり、粘土で厚く目止めがなされていたが、石棺内には土砂が流入しており、石棺の東西端ではほぼ蓋石の高さまで、石棺の中央部では上面から約20cmのところまで土砂に被われていたとのことである。土砂の除去作業にともなって、石棺東端より顔面が西方を向いた頭蓋骨が検出された。頭蓋骨は上部顔面～前頭部の部分であって、その下には下・中部顔面や脳頭蓋の部分が存在することが予想されたため、上砂ごと切り取り作業をおこない、そのまま筆者のもとに持参された。

その後、室内で慎重に土砂を取り除く作業を進めたが、頭蓋骨の一部が検出されたのみで、期待していた歯牙は検出されなかった。

なお、石棺内からは遺物は検出されておらず、石棺内に赤色顔料は塗布されていなかった。

検出骨はわずか1点であるが、頭蓋骨が石棺の東端から検出されていることから判断して、被埋葬者は東に頭部を置き、仰臥位で埋葬されていたものと推定される。

3. 検出人骨の概要

検出された人骨は前頭骨が1点のみである。左右の眼窩上縁から前頭鱗までの部分で、前頭骨としてはほぼ完全に残っている。骨の表面は黒褐色を呈するが、これはマンガンなどの鉱物汚染によるものであって、人為的なものではない。また、赤色顔料の付着も認められない。検出された前頭骨には、異常縫合の一種である前頭縫合は認められない。前頭骨のみから判断するには多少危険があるが、前頭部の膨隆はやや認められ、男性型の頭蓋というより女性型に近い。眉間の隆起は発達が不良で、眉弓の発達も弱いことから、本頭蓋は女性骨と判断してほぼ間違いないと思われる。検出された前頭骨は、冠状縫合の部分を欠き、縫合の適合閉鎖の状態は不明であって、年令の判定はできない。しかし、大きさや骨の厚みから判断して、成人骨であることは間違いない。

4. おわりに

今回検出された人骨は、成人女性のものである。骨の保存状況がきわめて悪かったため、詳細な検討をおこなうことができなかった。瑞穂町の古代人骨については出土例が少なく、その形質については不明な点が多い。花崗岩の風化上であるマサ土は水はけがよく、マサ土の遺構から検出された人骨は保存のよいことが多い。本遺構の場合は、周囲がマサ土であったにもかかわらず、人骨の保存は悪かったが、将来の発掘で保存良好な人骨が検出されることを期待したい。

最後に、本人骨の検討の機会を与えられた瑞穂町教育委員会の各位に厚く御礼申し上げる。

図版

図版第1



a. 鶴淵古墳群遠景（南より）



b. 調査区全景（南西より）

図版第2



a. 4号墳近景（西より）

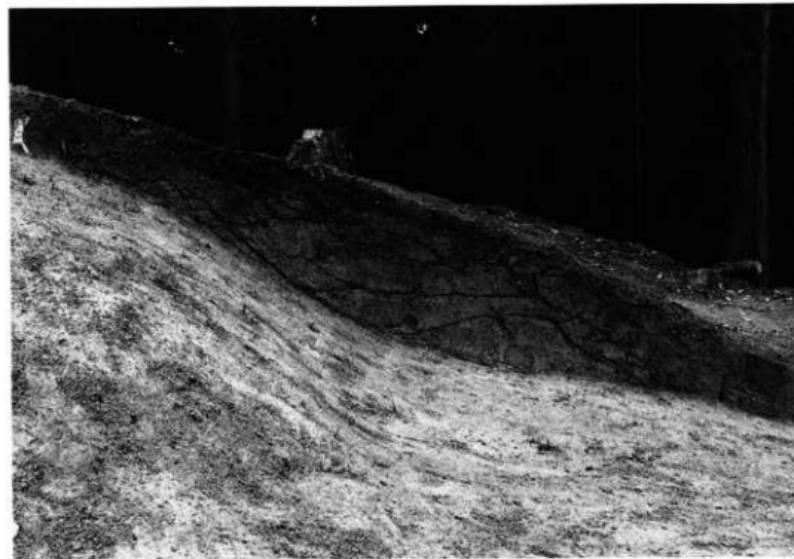


b. 4号墳北側土層断面（東より）

図版第3



a. 4号墳南側土層断面（東より）



b. 南側テラス付近土層断面（西より）

図版第4



a. 4号墳東側土層断面（南より）



b. 東側テラス付近土層断面（南より）

図版第5



a. 墳頂付近土層断面（南より）



b. 周溝土層断面（南より）

図版第 6



a. 周溝完掘状況（南より）



b. 南側テラス（西より）

図版第7



a. 北側テラス（西より）



b. 第1主体部石棺検出状況（南より）

図版第 8



a. 第1主体部石棺粘土被覆状況（北より）



b. 同（西より）

図版第 9



a. 第 1 主体部石棺蓋石配石状況（西より）



b. 同石棺蓋石除去後状況（西より）

図版第10



a. 第1主体部石棺人骨出土状況（上より）



b. 同副室検出状況（西より）

図版第11



a. 第1主体部副室完掘状況（西より）



b. 同側壁粘土被覆状況（南より）

図版第12



a. 第1主体部粘土除去後配石状況（南より）



b. 同（西より）

図版第13



a. 第1主体部石棺掘り方検出状況（東より）



b. 第2主体部石棺検出状況（西より）

図版第14



a. 第2主体部蓋石配石状況（西より）

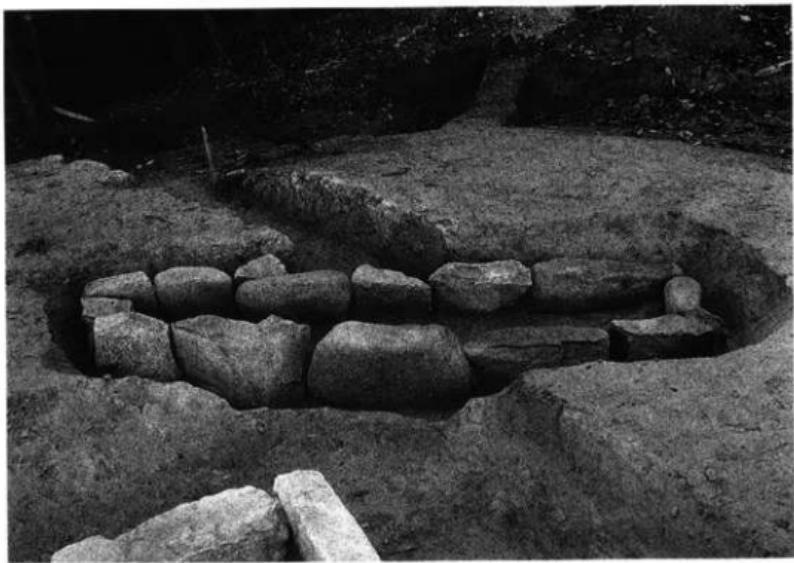


b. 同（北東より）

図版第15



a. 第2主体部石棺蓋石除去後状況（南東より）



b. 同石棺側壁、小口石配石状況（西より）

図版第16

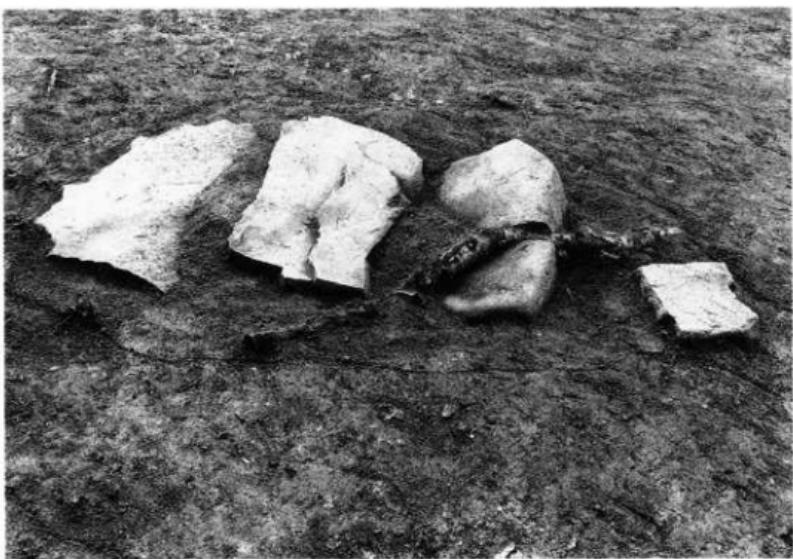


a. 第2主体部石棺側壁、小口石配石状況（南東より）



b. 同石棺掘り方検出状況（南東より）

図版第17



a. 第3主体部石棺検出状況（北より）

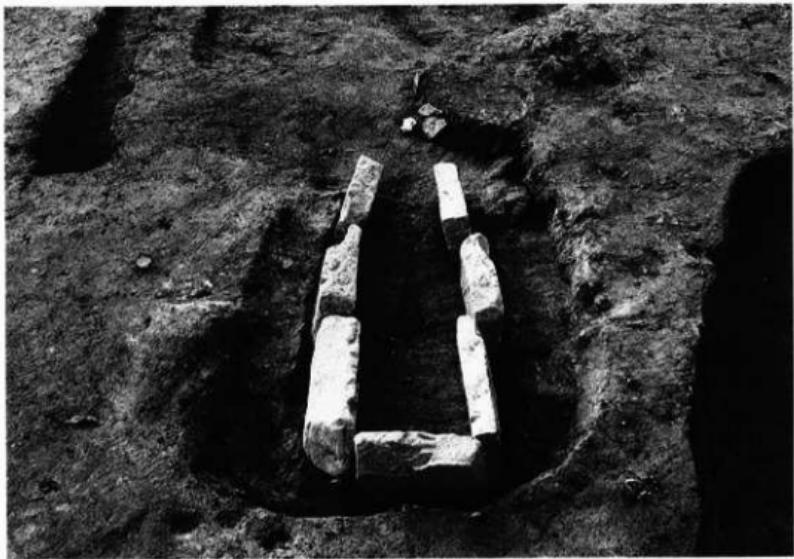


b. 同蓋石配石状況（北西より）

図版第18



a. 第3主体部蓋石除去後状況（西より）



b. 同側壁小口石配石状況（東より）



a. 第3主体部側壁、小口石配石状況（北より）



b. 同石棺掘り方検出状況（西より）

図版第20



a. 1号土坑上層断面図（南より）



b. 同完掘状況（西より）

図版第21



a. 2号土坑土層断面（西より）



b. 同完掘状況（東より）

図版第22



a. 4号土坑土層断面（西より）



b. 3号、4号土坑完掘状況（南より）

図版第23



a. 5号土坑土層断面（西より）



b. 同完掘状況（北より）

図版第24



a. 5号土坑完掘状況（南より）



b. 6号土坑上層断面（西より）

図版第25



a. 6号土坑完掘状況（西より）



b. 1号加工段遺構完掘状況（南西より）

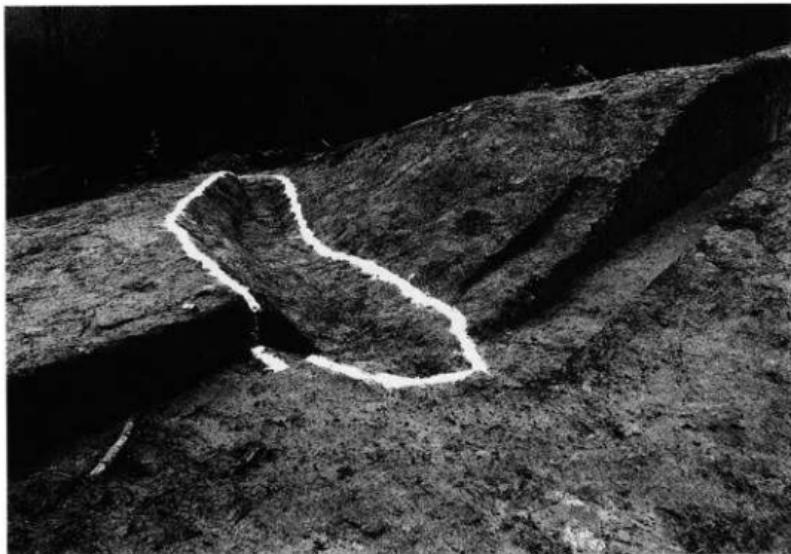


a. 2号加工段造構完掘状況（南西より）



b. 東側溝状造構完掘状況（南東より）

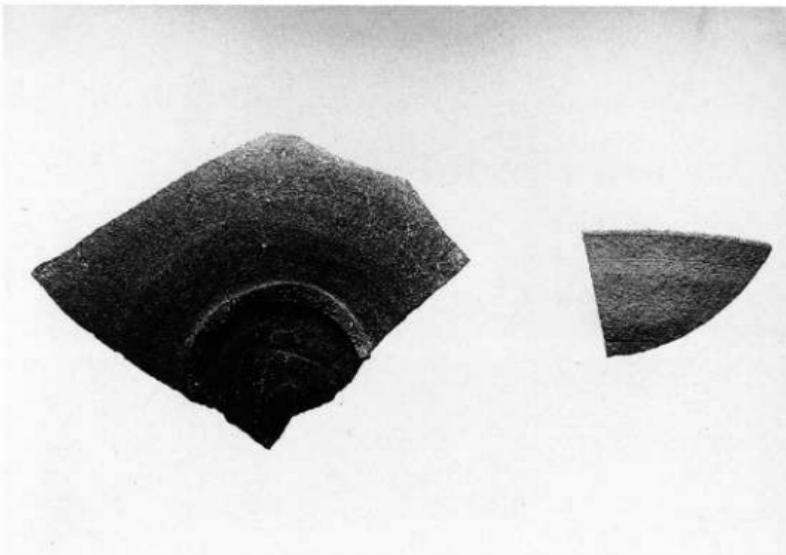
図版第27



a. 西側溝状造構完掘状況（南東より）



b. 道状造構完掘状況（北東より）



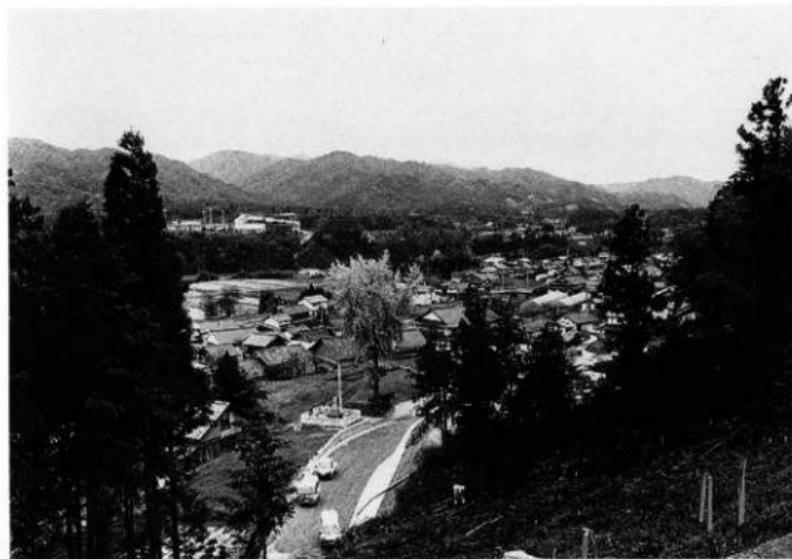
a. 調査区内出土遺物（須恵器）



b. 同（青磁）

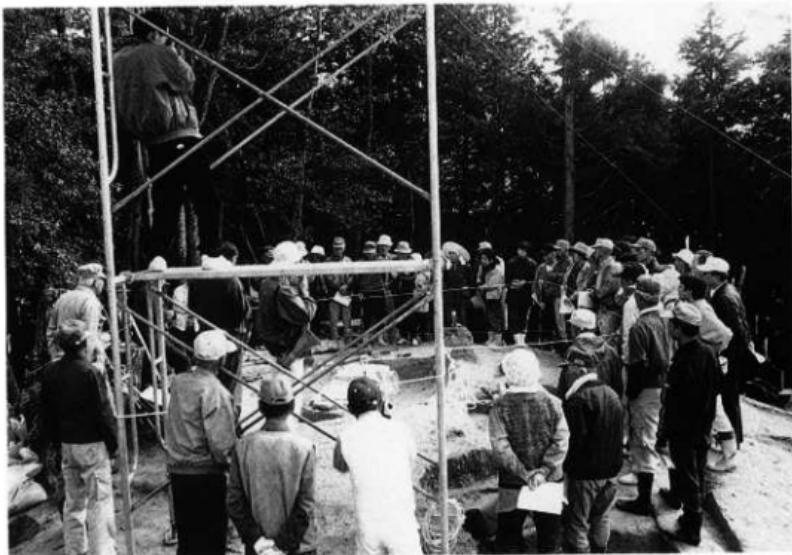


a. 調査区内完掘状況（南西より）



b. 4号墳より鰐淵集落を望む（北より）

図版第30



a. 公開發掘調査風景（西より）



b. 発掘調査風景（南東より）

図版第31



a. 発掘調査風景（西より）



b. 石棺搬出作業風景（東より）

報告書抄録

ふりがな	ますおちごうふんほかはくつちよさほじこくしょ							
書名	鰐淵4号墳他発掘調査報告書							
副書名	新山村振興農林漁業対策事業鰐淵水明寺線改良工事に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	森岡弘典 藤田謙弘							
編集機関	瑞穂町教育委員会							
所在地	〒696-03 烏根県邑智郡瑞穂町大字三日市32番地 TEL08558-3-1128							
発行年月日	西暦 1994年3月10日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鰐淵古墳群	しまねけん いこく ちむぎ たのめ まちよ 鳥根県邑智郡瑞穂町 大字鰐淵3009-1番地外	32445		34度 51分 32秒	132度 31分 58秒	19930901~ 19931126	1180	道路改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
鰐淵古墳群	古墳	古墳時代	方墳 (墳頂部に 箱形石棺 3基)	1基	須恵器、青磁	箱形石棺 3基の内1基 が粘土で完全に被覆さ れていた。	粘土で完全に被覆され た石棺より女性の頭骨 の一部が出土。	

平成 6 年 (1994) 3 月 10 日

島根県邑智郡瑞穂町
鱗淵 4 号墳他発掘調査報告書

新山村振興農林漁業対策事業鱗淵永明寺線
改良工事に伴う発掘調査

編集・発行 島根県邑智郡瑞穂町教育委員会
印 刷 柏 村 印 刷 株 式 会 社